

審査員談叢

文展洋畫所感

文

展も毎年同様の事を繰り返して居るから出品畫に就いて感ずる事も別段そう大した變りもないもの、様であるが、仔細に洞察して見ると、僅一年の間に於ても其處に多少の變化を認める事が出来る。本年の文展に表はれたる傾向と從來のそれとを比較考察して少しく洋畫部に於ける所感を述べて見よう。

本年文展洋畫部入選の諸作は昨年と比較して面白い繪が多く成つたと云ふよりも、畫面を整へる事に骨を折るやうになつて來た傾向を窺ふ事が出来る。是は全く洋畫製作上の進歩と認めるのである。然し繪として同一作家の作品を比較すると、或は昨年よりも見劣りのするものがあるけれども畫面を整へると云ふ點、つまり畫を作るに云ふ意味に於て一般に進歩を爲した事は明らかである、畫面を整へる——繪を作る——と云ふのは、要するに繪の具の使用法、或は筆づかひ等の關係も相交つて居る譯であるが、此二つの點には著しく上達の跡を認める事が出来やう。此繪を作ると云ふ事に關しては自分も既に兩三年前から感じて居つた事であつて、單に私自身に就いて考へて見ても、自分は三十年來油畫の研究に従つて居るが今日のところでは只僅かに油繪具を以て自然を寫すと云ふ極く初歩の程度に止まつて居つて、一つの畫を作ると云ふ點に到つては、甚だ未熟、否殆んど出来ないといつてもよい。如何に考へて見てもスケッチと云ふものが決して繪畫の本領では無く、美術品として完全なものを求めるには種々な條件がマ含まれねばならぬ、先づ第一に畫面を整へる事が最も必要であるが、是は色の調子とか構

圖とか云ふ事のみでは無く筆の使ひ方も加はれば、又は繪の具を塗る厚味とか或は繪の具の性質等に迄も深い注意を要する事であつて、今後此研究を遂げねばならぬことを深く感じて居る。此點には自分自ら明らかに其缺陷を意識して居るので、絶へず是を補はねばならない事を考慮して居るが、機會があつたならば更に外國へ留學して、一度充分此邊の研究をして見たいものと思つて居る、兎も角私は今やつと畫を作ると云ふ研究時代に這入つて居ると信じて居るが、同時に我洋畫界も亦眞面目に此製作時代に入らねばならぬ時代に到達したと思ふ、本年の文展の洋畫は要するに此傾向を帯びて來たと感ずるのである。つまり私の考へた通り、單純なるスケッチを脱して漸次製作の時代に這入つて來たのであつて、此現象は兎に角いゝ傾向になつて來たものと云ふ事が出來やう。如上の見解はつまり多く技術的方面の事に屬して居るが此技術と相對して感覺的の事も勿論忘れてはならない、我々洋畫家の努力すべき點は、其基礎を寫生に置いて美術觀念の上から或は又感覺を表現する等の手段として更に其寫生を離れなければならない場合もある、此畫面を整へると云ふ技術上の修養と精神的方面の作家の自然に對する感覺の精練とがなければ到底立派な繪を作り上げる事は出來ない。此意味に於て本年の洋畫は昨年の方れと比較して大いに見えるべき進歩があると思ふ。而して此兩方面が一致して漸次進むにつれて眞の洋畫の形を爲すに到るのである。

此精神的方面の事は最も難い事であるが今日では其點にも留意しつゝある過程を示して居る、洋畫の製作は、自然の模寫が出發點となつてゐるから、従つて多く寫實に流れ易いものではあるが、然し先づ寫實に流れる位に寫生力がなければ感覺を十分に表はす力を出て來ない、一旦危期に到達してそれから又更に進まなければならぬ

いのであるから吾れくは大に勉強しなければならない。

黒田清輝

『改卷美術新報』二二大正七年一〇月三日